



ハイリ ハイリホ



阿門 遊

——— パパ

「パパ、パパ、パパ、パパ」

「ねえ、パパ」

「パパ、大変だよ」

「パパ、早く起きてよ、すごいことになっているよ」

何度も俺を呼ぶ子どもの声に目が覚めた。

なんだい、竜介。さっきから大きな声を出して、と右手で両目をこすりながら俺は答える。猫じゃあるまいし、いつもこうだ。目やにでも出ていれば、顔中に汚れを塗り広げているようなものだ。しかも、こんな時に限って、人が来る。何度も鳴り響くチャイムに慌てて玄関に出る。目やに拭うのを忘れ、片側に押しつぶされた寝癖の髪のまま、どんな御用ですかなんて、何の感情も込められていない、きまりきった常套句で対応をする。そんな時、相手は必ずこう言う。

「これは、これは、大変失礼いたしました。おやすみ中だったのですか。無理に起こしてどうもすみませんでした」と、相手もとりあえず常套句で切り返してくる。

だが、相手に、申し訳ないなんて気持ちなんかあるものか。こんな真っ昼間から昼寝しているなんて、どこのどいつだ（目の前にいる俺だ。眼を大きく見開いても、眼を細めてもよく見えるだろう）、よっぽど暇な奴だ（ほっといてくれ。人生の三分の一は睡眠だ。つまり、暇つぶしのために人は生きているのだ）と顔がしゃべっているのが分かる。

そして、俺も一時間くらい昼寝をしてみたいよな。今日は、上司からの命令で、一軒、二軒、三軒と、こうして訳のわからない客のいる家を訪問している。（何が訳がわからないのだ。昼寝の理由なら後で、俺が説明してやる。待っている。）

朝一番の朝礼から作り上げた機械仕掛けの営業用微笑みも、一日中じゃあ、筋肉が引きつり、お面を被っているみたいになる。凍りついた笑顔は、相手に好意を与えるどころか、敵対心さえ呼び起こす怒りの形相だ。笑いと憤怒は、顔の皮一枚の表裏一体だ。どちらが表でも裏でもいい。時には、感情の皮が折れ曲がって、笑いながら怒るといふ、奇妙な、器用な現象が起こることさえある。微笑が一番というが、どこかのファーストフード店じゃあるまいし、サービス スマイル0円ということは、笑顔には価値がないということだ。

値段は客が決める。サービスが悪ければ、二度と店には行かない。ひきっているのは顔だけじゃない。足だって同じくらい疲れている。足が棒のくせに、体を支えるつかえ棒にもならず、強風が吹けば、その場で倒れ込んでしまいそうだ。営業部長のアジテーションが追い討ちをかけ、肩に重く押し掛かる。重圧に耐え切れず、体の倒れた方向が、次の訪問先だ。進む先も風まかせ。いや、体の疲れまかせ。

こんな気ままなやり方では、売り上げが伸びないのも自分自身が一番わかっている。また、何軒もの顧客を訪問し、紙に書いたような宣伝文句をしゃべっているうちに、喉も渇いてきた。せ

めて、お茶の一杯、いや、缶コーヒー、いやいやビールの一本でも出してくれたらありがたいんだが。おつまみは、ピーナッツでいやなんて顔もしている。喉が渴いているくせに、乾き物を食べれば、よけいに飲み物が欲しくなるだろう。当たり前なことだ。それなのに、家に飲み物がないのだったら、ちょっと待ってくれ、近くのコンビニで買ってくるからと相手が言い出すのを期待している顔だ。

けしからん営業マン。お前は、一体何様だ。それに比べて、自らの睡眠までを削って、相手をしている俺様は神様だ。とにかく、俺が眠っていたのは、昨夜から破裂した水道管の修復のため徹夜工事を行い、今しがた帰宅したばかりで、ソファーに倒れこんだからだ。あんたと同じように、俺もさっきまでは同じ憂き目にあっていただけだ。その理由を初対面の相手にいちいちしゃべるわけにもいかないし、そんな暇があったらもう少し眠りたい。ただし、永遠の眠りは御勘弁だ。

ただ、俺の顔は、寝不足の不機嫌さと目やにとナメクジが通ったような白いよだれのひとすじが付着している。今、目の前にいる営業マンが帰った後で、鏡を見てまじまじと自分の顔をよく調べたら、他にも宝物が山ほど見つかるだろう。こんな顔見たら、誰だって勤労意欲を無くしてしまう。同じ労働者として、不快な気持ちを相手に感じさせまいとする、俺としての最大限のやさしさの表現なのだ。わかってくれ、同胞よ。

二一一 僕

パパは、いつもそうなんだ。起きているのか、寝ているのか、それとも、中間地帯の夢ごちなのか、僕には、よく分からない。分かることと言ったら、多分、パパは、パパの脳の世界があって、その世界の中で、暮らしていることだ。それが、証拠に、僕が話しかけた時、返事はしてくれるが、目はいつも自分の頭の中の内側を覗いている。パパはいつも自分しか見ていない。少しは、僕をちゃんと見て欲しい。

僕だって、自分のことしか考えていない時もあるけど、それは、ちゃんと行動にでている。お菓子が食べたくなったら、台所の棚を覗くか、喉が渴けば、冷蔵庫から健康飲料水を取り出す。その後は、決まってテレビゲームをやったり、漫画の月刊誌コロコロを転がって読む。本当にわかりやすい。やりたいことをそのままやっているだけだ。

僕の行動を見れば、僕の考えていることがわかる仕組みだ。パパが少しでも僕のことに関心を持ってもらうよう、ちょっと驚かせてやろう。

「パパ、パパがどんどんと大きくなっているよ」

竜介の声が、驚きから悲痛な叫びに変わった。いけない、いけない、また、他の事を考えていた。竜介の声で俺は目が覚めたのだ。白昼夢の中で営業マンと会話するためじゃない。「パパが大きくなっているんだって」竜介の言葉をそのまま繰り返しながらも、冴えない頭の中では、何を言っているんだ、俺をからかっているのかと怒りと疑問の声が発せられる。

残念ながら、俺の成長期は、既に終わっている。身長においても、仕事においても、人格においても、これ以上大きくなることはない。哀しいかな、寂しいかな、これだけは断言できる。年に一度の人間ドックで、気休めに身長を測ることがあるが、これも体重を確認するための付録みたいなものだ。

反対に、体重だけは確実に増えていき、その一キロ一キロにあきらめと失望が刻み込まれ、今年も一年が終わるのだ。下腹のまわりのみが盛り上がりを見せ、体重線が一本、また一本と増えていく。この一本が十年なのか、四十歳代の俺には、今、四本の皺が刻み込まれている。腹の皺が年輪なわけだ。腹の線が俺のこれまで生きてきた成長の証なのだ。

だが、年相応の皺を見て、何とか減らしたい。一歳でも、二歳でも、若く見てもらいたいという最後のあがきの気持ちがふつつつと沸いてくることもある。もちろん、十代、二十代の人から見て、三十九歳も、四十歳も、いくら若く見せようとささやかな抵抗をしたとしても、同じおじさん、中年のひとくくりの中にはいつてしまうだろう。

俺だって、本当に若い頃は、腹の線が無いころは、同じ眼を持っていた。新入職員として入社した俺の職場の直属の上司は、年の頃は四十前だったはずだ。ワイシャツの胸の部分が左右に引っ張られ、皺が上下に幾重にもでき、砂丘の風紋のように見えた。太っているのか、ワイシャツが一回り小さいのか、どちらかはっきりしろと言いたかった。今日は無礼講だという宴会の席で、ワイシャツの胸の部分を引っ張り、上司の物まねの一発芸をしたところ、笑いこける同僚と、むっとした上司の顔が今も思い出される。

その四十代に、俺は光栄にもなった。だからといって何をやる訳でもない。このままでは駄目だ、何かをしなければという気持ちは、俺の心の中で、小さい泡として、割れては消え、消えては現れるが、決して互いが結んで、大きく成長することはない。俺の体の成長は、既に終わっているのだ。

そして、失望だけが永遠に続く。それに比べて、子供は毎日が発達・発展だ。柱の傷じゃないけれど、居間の見せかけの大黒柱に貼ってある紙には、竜介の身長が五年前から印されている。三か月で二センチ伸びることも不思議ではない。成長とはうれしいものだ。身内のことだからと言うより、他人事だからこそうれしいのかも知れない。自分の成長期の時に、背がいくら伸びたからうれしいという感情は湧いてこなかった。今、この時の瞬間を生きている人にとっては、成長の過程なんてものは、どうでもいいことなのだろう。

前へ、前へ進む人間にとって、後ろなんて振り返る必要がない。また、その暇もない。後ろを

振り返っても、前へ進んでいるため、過去の自分の位置が確認できない。振り返っても、さっき立ち止まった場所よりもさらに前へ進んでいる。お前の居場所はもうここにはない。前にあるだけなのだと言時間がかく。足跡がそう語る。

その点、俺はどうだ。成長が止まった俺は、ここで終わったのかと悟るときこそがこの世のお終いなのか。ここが俺の居場所だ。俺の最終地点だ。ここしか前へ一歩も進めないのだ。後退することも許されない。この息苦しさは何だ。酸素が切れかかっている。我が息子よ、前へ進め。もっと向こうには、新鮮な空気が待っているぞ。

まあ、それでも毎年身長を測っていれば、そのときどきで若干の変化はある。やはり、身長が伸びていけばうれしいものだ。だがその原因は、散髪もせず、二か月もほったらかしの頭のせいだ。不思議なことに、髪の毛や指や足の爪だけは他の器官におかまいなしに確実に伸びている。末端成長。憂鬱だが、唯一成長している部分だ。だが、髪の毛が少なくなっている人は、確実に身長も低くなっている。猫背の人間は、また、少し、猫に近づいている。にゃあ、にゃあ、にゃあと日がな一日戯言を囁き続ける。縁側から落ちて、たんこぶでもできれば、背が伸びたことになるのか。今さら、大相撲部屋に入門するわけではない。たんこぶを増やしても、何のもうけも利点もない。

また、話がずれた。ひよっとすると、俺は、眠りながら頭を打ち続けているのか、起きているときでも、身長を測るために柱に傷をつけているのか？どちらにせよ、この年齢で、身長が低くなるのは理にかなっているが、伸びるだなんてかっこうが悪い。ガリバー君じゃあるまいし、折角、新調した背広がチョッキになってしまうし、ズボンだって裾は大きく切ってしまったので、修復のしようがない。切りすぎた布切れを、つぎあて用のためにもらったところで、タンスの隅にしまい込んでしまい、どこにいったのかわからない。また、見つけ出したところで、今更、端切れを繋げることはできない。チョッキと半ズボンの取り合わせなんか、いくらエコ、消エネの時代にマッチしているかもしれないが、ぶかっこうすぎる。着ているうちに、チョッキと半ズボンの繊維質が伸びて、ちょうどよくなる。ピッタシ、カンカンだ。（少し古いか）

だが、それにも限度があるだろう。知らない間に、ズボンのお尻の部分が、縦一列に破れて、大きな窓が開き、周りからくすくす笑われているのにも気がつかず、一日が過ぎることになるだろう。それだけは、勘弁してくれだ。後ろ指じゃなくて、後ろ尻だ。後の祭りか、後の赤っ恥か。それにしても、くだらんことだけは、次々と想念が沸く。頭の中にやかんがあって、くだらんの素のパックを入れると、湯気となってふつふつと湧き上がってくるのだ。時には、ピーピーという音が鳴り響き、せっかく押さえつけたふたを吹き飛ばしてしまうこともある。

仕事では、いいアイデアは浮かばないが、こうした何の役にも立たないことは、自分でも楽しい、嬉しい、哀しいくらいに噴き出してくる。本当に、満足、満足、不満足、不満足だ。このアンビバレンツな気持ち。誰も俺を止められない。どうだ、誰か、俺を止めてみる。草原を走り抜ける蒸気機関車か、ハイウェイを猛スピードで逆方向に走る車。それが、俺なのだ。

しかし、こんなことで大見得を切っても仕方がない。それに、一体、誰に対して、自慢しているのだ。困ったもんだ。それともこれが俺の成長の証か。

待てよ、ふと、やかんの中から、疑念が湧いた。俺の身長は確か百七十五センチ。ソファの

長さは二百センチ。眠気に襲われ、体全体でソファに倒れこんだときには、ソファの中に十分余裕のよっちゃん、うまく納まっていたはずだ。俺の耳が最後に聞いたのは、ずっぽりという音だった。ひょっとしたら、ずっぽりかも知れない。何かに抱かれるというなら、ずっぽりだ。ずっぽりだと溝に落ち込んで、急いで家に帰って足を洗わないといけない感じがする。ゆったりとおやすみの気分じゃない。

その点、ずっぽりだと、体全体がソファに、うまく納まった感触だ。いい響きだ。ソファが母のごとく、俺をやさしく包み込んでくれたのだ。そう言えば、ここ数年、誰かに抱かれたことも、抱いたこともない。こうして無機質なソファだけが俺の母胎なのか。俺の体から限りなく体温を奪うだけのソファ。それを知りながら、永遠に身を委ねる俺。哀しいがゆえに心地よい。ゆできれない、冷えカエルよ。それは俺だ。ただただただただ、冷たく眠れ。と、思う間もなく、睡魔がまぶたを閉じさせた。愛よ、今一度。

二一 二 僕

眠っているとき、パパはいつも何を考えているのだろうか。どんな夢を見ているのだろうか。僕の夢は簡単だ、大抵は、寝る前に見たテレビの番組の影響を受けている。

例えば、お笑い系の番組だとしよう。僕の頭の中に、僕専属のお笑い芸人が出演し、僕を笑わせてくれる。たまには、僕がお笑い芸人となり、どこか知らないけれど、お客さんが超満員の舞台上に立ち、ピン芸を披露している。

でも、僕はどちらかと言えば、漫才やコントなどの二人芸の方が好きだ。僕が突っ込んで、相手がボケる。相手が突っ込んで、僕がボケる。ボケと突っ込みのシーソーゲーム。その方が、話の展開が広がる。

その後、二人だけの話から、特定のお客さんを一人、また一人と誘い込み、最後には観ているお客様全員を僕たちの笑い渦に巻き込ませてしまうのだ。観客は、あーれーと叫び、時計回りで回転しながら、僕たちの笑いの台風の目の中に喜んで飛び込んできてくれるだろう。やったね、相棒、今日は、大成功だ。手を取り合い、はしゃぎ飛ぶ二人。そして、隣の相方の顔を見ると、それはパパなわけだ。パパ、今度は、僕が突っ込むよ。

「パパ、パパ、本当に大変なんだから、早く起きてよ」

再び、竜介の声が俺のまぶたをこじ開けさせた。眠っている間に、ひざから下がソファからはみ出ている。二度寝のせいか、足癖が悪い証拠なのか。母胎を足が突き破ってしまった感触だ。ふにやらふにやら。不安な気持ちなのか、それとも何かを達成した充実感なのか。

お前がお腹の中にいるときには、よく蹴られて痛い思いをしたよ。お医者さんに相談すると、元気ですくすくと育っている証拠ですよ。将来は有名な陸上の選手になりますよとおせいじを言ってくれたけど、人間なんて生まれる前が一番いいね。こうして成長してしまうと、陸上選手どころか、ふとんを蹴り上げることしか役立たないのだからと、俺の体にふとんをかけ直しながら口癖のように母が言っていたのを思い出した。

くすくすものだ。それとも、もう少し大きな声で自分を笑えばいいのか。かっかっかっだ。次は、くっくっくっだ。そのまた次は、けっけっけっだ。そして、最後に、こっこっこっだ。発見したぞ。か行は、笑いの宝庫だ。笑いで世界を平和にするぞ。ちょっとメモっとう。まあ、これぐらいで自分を笑うのは勘弁しといてやろう。

寝相が悪いと言えば、竜介もそうだ。二時間置きに時計回りにふとんの上を回転している。朝目覚めたときには、元の位置に頭が戻っている。だから自分も他の家族も竜介の寝相の悪さには、気づいていない。二時間ごとに、私がふとんをかけていることはもちろん知らない。俺の寝相が悪いのだから、竜介の寝相が悪いのも当然だ。子供の遺伝子が親に伝わることはないのだから、親の遺伝子が伝わったのだろう。そう、すべて俺が悪いのだ。

だが、竜介にとって親である俺も遺伝子を受けた子に過ぎない。そうになると、俺の親も寝相が悪いだろうし、その親も悪い。そのまた、親も悪い。どんどん世代を遡ってゆけば、人間の祖先、いや、生物の祖先そのものが、寝相は悪いのだ。寝相が悪い遺伝子を生み出し、変異させることなく、さらに特化することで、受け継がれていった。

何故なのだろう。俺が思うに、どんな生物でも、睡眠が必要だ。だが、その睡眠中がもっとも敵から攻撃を受けやすい状態にある。攻撃される、すなわち死、種の滅亡となる。種を維持していくために、睡眠中でも絶えず体を動かし、こちらが眠っていることを相手に悟られないようにする必要がある。そのために生み出されたのが、寝相の悪さ遺伝子なのだ。この遺伝子を引き継いだものが、生き延びることができ、子孫を残すことができたのだ。俺もその一人だし、竜介もしっかりとその一人に選ばれたのだ。

それじゃあ、今、生き残っている人間は、全員、寝相が悪いということか。それなら、俺の存在価値もたいしたことない。これからは、道端で人に会ったときに、「こんにちは、いいお天気ですね」の代わりに「今日も寝相が悪かったですか。少し、寝不足気味ですか。でも、そのお蔭で生き残ってよかったですね」とあいさつをすることに切り替えよう。

遺伝子の話はもういい。なん慰めにもならない。とにかく、俺は寝相が悪いのだ。正真正銘寝相が悪いのだ。ソファから足がはみ出したのは、寝ながら頭がほんのちょっと、そうほん

のちょっと下にずれたのだらうと思い、元の位置に頭を戻そうとした。

ぐきっという音がした。首がくの字に曲がったのだ。あいさつをする時、お礼を述べる時、あやまる時の、頭を下げるくの字ではない。本当のくの字だ。苦の姿だ。元々、バランスは悪かったかも知れないが、頭はソファの肘置きから上にあっただはずだ。肘置きから落ちた俺の顔からは、テーブルの椅子が見える。少し目を転じれば、フローリングの上に輪ゴムが落ちている。

何故だ。何故、輪ゴムが落ちているんだ。昨日の夕食のとんかつの横に添えられていたはずのキャベツも輪ゴムと仲良く並んでいる。今週末は、竜介と一緒に、大掃除だ。掃除機に、モップに、たわしに、雑巾に、掃除道具すべて総動員の体制で臨むぞ。早く除いてしまわないと、輪ゴムやキャベツが化石となって、次々とフロアに積み重なってしまう。

恐竜やマンモスの化石ならまだしも、しなびたキャベツや輪ゴムの堆積された床なんて真っ平だ。この家が地震か大洪水で埋もれてしまい、後の世に、発掘された時、祖先は、よっぽど掃除が嫌いだったのか、それとも、キャベツと輪ゴムの化石に何らかのメッセージが込められているのかと、仏壇の前で語られても困る。語られてもいいが、しなびたキャベツやぷつぷつと切れる弾力性のない輪ゴムが俺の形見というのも情けない。

せめて、年に一度の盆の時ぐらひは、俺のことを思い出して、いい人だったね、と思って欲しい。いや、正月にも、お墓参りをしてもらいたいし、春分の日、秋分の日もそうだ。忘れていた、俺の命日もある。そうすると、年五回だ。まあ、これくらいのぜいたくは許されるだらう。どうせその頃、俺はその事実を確認できないのだから、要望だけはしておこう。

ひょっと、極楽の雲のすき間から様子を伺うことができても、地獄の深い暗闇に射す一筋の光を見上げたとしても、俺の声は届かないのだから。とにかく、立ち上がらなければ。立ち上がらなければ前へ進めない。例え、頭を叩かれようと。俺は、むちうちぎみの首を押さえながら、ソファから体を起こし、床に足をつけ、背を伸ばした。ドーンという音が俺の両耳近くで響く。目からは、綺羅星が発するのが見えた。漫画の光景だ、省エネ時代に適応した、人間懐中電灯か。

それはいいとして、今度は、天井に頭をぶつけたのだ。本当に、頭を打ちつけられた。誰だ、こんなところに天井を置いているのは。家の中を天井がぐるぐると回っているのか。うーん、天井説じゃあるまいし、天井を置くわけではないか。しかし、本当に、痛い。首の次は、今度は頭か。頭のとっぺんから足先まで痛みが瞬時に通過した。通り過ぎついでに、雷みたいに地面までに痛みが抜けてくれれば楽なはずなのに、何故かしら、足先から跳ね返って頭に戻ってくる。だから、痛みは消えない。この痛みが頭からまた足先に戻る。痛みが体の中を何度も何度も周遊している。

俺を弄ぶのがやめてくれ。痛みを耐えかねる。だが、痛みの速度はどのくらいなのか。神経の伝達速度なのだらうが、これを利用して何かビジネスチャンスはないのだらうか。意識の宅急便はどうだらうか。俺が考えていること、思っていることが、口に出さなくても、瞬時に相手に伝わる。遠くの大事なあの方に、ちょっとした心のお歳暮を贈りませんか。なんていい響きだ。妄想なら得意だが、口下手の俺としては、考えていることの半分以上も口に出せなくて、理解されず、また、思ってもいないことまでも相手が勝手に想像して、誤解を受けたり（正解の場合も

あるが)、辛い目に会ったりすることもあるが、もうそんな心配もない。

さてよ、いいことばかり伝わればいいが、こんちくしょうやふざけるなという悪い感情までもが相手に筒抜けになってしまえばどうなるのだ。インターネットのように世界中に張り巡らされた神経の中を、中傷したり、罵倒したりする意識が駆け回る。家族中、地域中、会社中、日本中、果ては世界中が、感情戦争になってしまうだろう。第四次世界感情大戦。それは、国と国との戦いから、個人と個人の戦い、相手の存在を消し去ること目的としたものになる。

せっかく、寝相の悪さを利用して生き残ってきた人間なのに。その結果、誰もいなくなり、人間以外にとっての世界が平和になる。これが本当の平和なのか。難しいことを考えていたら、再び痛みが襲ってきた。頭に手をやる。幸いこぶもない、背も伸びていない、出血もしていない。なでなでしてやる。痛い、痛い、飛んで行け。飛んで行ったら、誰かに引っ付いてしまえ。自分の不幸は他人の蜜。他人の不幸は自分の生きる喜び。子どものおまじないだって、たまには役に立つ。

しかし、ずっと俺は子どものままだ。おかげで、少しは痛みが和らいだ気がした。痛みが消えたのか。痛みさえも感じなくなったのか。それにしても、疑問だ。生きていること自体が、疑問の連続だ。朝起きて、パン一切れの疑問を食べ、昼にはうどん一杯分の疑問を食べ、夜には、ステーキ皿分の疑問を食べる。寝るときに、今日一日の疑問を五回ほど反芻しながら、咀嚼し、翌日の朝、全てを便所に流す。

疑問が、疑問のまま、何の解決もされずに垂れ流される。垂れ流された俺の疑問は、下水を通り、他人の疑問と混じりあい、疑問収集施設に集められ、処理される。処理といっても形だけだ。集められたすべての人間の疑問は、そこで沈殿し、上澄みの解決可能な疑問、解決されたと思われた疑問だけが、海へと流される。体制を壊すような、人間の存在自体を危うくさせるような疑問は、底深く澱のように溜る。

何世代も、何世代もの澱は、永遠に解決されることなく、堆積し、地層化する。やがて、地の底から、怒りにも似たマグマが噴出し、地上の俺たちに降りかかったとき、体全体を疑問が蝕み、存在を亡きものとする。そして、人間たちの時代が終わりを告げ、新たな生物が、この地球を支配することになるのだろう。その新生物も、一時期においては、この地球を支配し、自らの時代謳歌するものの、解決できない悩みが大爆発をした時に、滅び去る。この繰り返しだ。

生物の進化の話はどうでもいい。俺は、今、自分の身に起こった疑問を解決しないといけない。何故、天井に頭をぶつけるんだ。いや、ぶつかったんだ。俺は、いつからこんなに身長が伸びたんだ。それとも、寝ている間に地震でも起きて、二階が落ちてきて、天井が低くなったのか。

それなら、もっと大きな音や揺れがあっただろう。地震にも気がつかないなんて、よほど俺は熟睡していたのか。さっき天井に頭を打ったように、何かが俺の頭に落ちてきて、気でも失っていたのだろうか。それなら、竜介は大丈夫なのか。俺を呼んでいるからには、元気な証拠だ。

子供を守ってやる立場の親が、子供に守ってもらっている。主客転倒だ。母屋の代わりに、ひさしがメインとなっている。まあ、いずれ、こういう時がくる。親がいつまでも子供を守れるわけがないし、また、そうであっては困る。それが、早いか、遅いかだが、まだ、竜介は小学生だから、守ってもらうには少し早すぎる気もする。その分岐点はいつなのか。そこからが、親の威

敵がなくなる時だ。

一番早いのが体力の分岐点だ。日頃から、会社と家の往復、たまの休みも家でごろごろでは体力、運動能力の低下は、日に日に増すばかりだ。昔ランニングをしていたおかげで、今なら、家の近くの池の周りを竜介と競争しても勝てるし、（翌日には、必ず、足がパンパンに張っている。二日連続の勝負はきつい。）庭の地面に土俵を描き相撲をしても、親の力を見せられるが、竜介が中学生になると状況が変わるだろう。

俺の親がそうだった。力くらべの相撲を父親とやり、初めて勝ったのが中学生の頃だ。身長も親より大きくなり、力も強くなる。子が親を上回る時だ。その時の、その瞬間の、親の気持ちは一体どうなのだろう。子供の成長を祝う気持ちか、それとも、会社で誰も相手にしてくれず、嘲笑的の自分が、唯一、力を誇示することができた対象からも見放された喪失感なのか。もうすぐ、その結果がわかる。全ての親が感じることができる特権だ。

その次は何だ。勉強か。いや違う。今の子供の勉強は俺たちの頃よりもさらに難しくなっている。パパ、これ教えてなんて言われても、学校の先生か、塾の先生に聞きなさいというぐらいだ。指示はできても指導ができない。学校や塾の先生だって大変だろう。

俺と同級生の仲にも、小学、中学、高校の教師がいる。昔とった杵柄だけでは、教師面はできないだろう。まして、学校の勉強から遠ざかった俺なんか、勉強面においては、すでに親の立場などないのだろう。また一步、また一步、竜介が俺に近づき、俺を追い越す。ハードルが低すぎるだけなのか。元々ハードルに値しなかったのか。

いかん、いかん、我が身に帰れ。意識よ、現実に戻れ。もう一度、頭や顔の辺りを触ってみるが、なんら傷跡や痛む箇所はない。もう、大丈夫だ。頭に外傷はないが、問題は中身かも知れない。竜介がこちらを見ているのに気がついた。

二一三 僕

パパは少し、驚いているみたいだ。なんとなく雰囲気わかる。多分、パパの頭の中は、今も、嵐が吹き荒れているのだろう。僕のささやかな問いかけに対して、一生懸命応えてくれているのが手に取るようにわかる。

今のパパは、僕の手ひらの中。そのコップの中で、渦が巻き起こっている。パパ、もう少し我慢してね。僕に、付き合ってよ。だって二人は名コンビなんだから。

「ほらね、パパ、こんなに大きくなっちゃって」

一一四 パパ

大きくなっちゃってだって。確かに、昨日まで、いや、さっきまで、俺の胸ぐらいまであったはずの竜介が、今は俺の臍のあたりまでしかない。竜介が縮んでしまったのか。成長著しいはずの子どもが、縮むなんて。お蔭で、俺の親としての面子は、当分の間、保たれる。ありがたいことだ。

「一体、どうしたんだ、竜介」

仁王立ちの姿勢で、尋ねる。威厳を取り戻せねば。今がチャンスだ。

二一四 僕

ほら、ちゃんとパパが細かい芸をしてくれる。なんだか知らないけど、パパがパパ足る確証を搦んだみたいだ。訳が分からないまま怒っているパパはいやだ。すべてじゃないけど、少しは僕の言い分を聞いて欲しい。僕の我ままにある程度付き合ってくれるのもありがたいけど、何でも素直にハイハイと聞いてくれるのも少し物足りない。僕は、その点、贅沢なんだ。

およそ三万日の地球旅行のうち、パパと暮らせるのは二万日。そのうち、こうして顔をつきあわせていられるのは、僕が小学生の時の二千日ぐらいだろう。中学生になれば、友だちとの付き合いが増えるし、今まで以上に難くなる勉強や読書、音楽の趣味など自分と向き合う時間が増えてくる。パパからだんだん離れていく。共に住んでいながら、やがて来る別れ。成長に伴う家庭内別居。パパ、今のうちに、できるだけ一緒に遊ぼうよ。

「知らないよ、友達の家から帰ってきたら、パパが大きくなっていたんだ」

一一五 パパ

子どもの言葉が終わらないうちに、ぐぐぐという音が聞こえた。何かが伸びる音だ。お腹が減ったわけではない。待ってくれ、一体どうしたんだと思うか思わないうちに、頭は天井を突き抜けた。

二一五 僕

精一杯、演技を続けてくれるパパ。名演技だよ。僕が、このままちゃんと演技を続けてくれたら、我が家のアカデミー賞をあげるよ。だから、頑張って、パパ。ほら、肩の力をもう少し抜いて。

でも、そうして何事にも、一生懸命、真面目に取り組んでくれるところが、僕がパパの好きなところさ。話はまだまだ続くよ、ボケ続けてね、パパ。

「パパ、パパ、天井が壊れたよ。ママに叱られるよ。僕は知らないから」

一一六 パパ

天井が壊れたことを心配するより、パパの頭が無事かどうかを心配してくれ、竜介。天井は修理できても、パパの頭は直せないぞ。頭をゆっくりと手で触ってみる、大丈夫だ。血は出ていないし、こぶもない。よっぽど俺の頭は固いのか。頭の固さだけなら、大人になった竜介には負けまい。これを武器に一生暮らしていける。安心した。

いや、そんなことはどうでもいい。今度は、ぐわーという音とともに俺の頭は二階の子ども部屋に突き抜けた。俺が見た風景は、台風が通りすぎた景色。あれほど、何回も何回も注意しているのに、なんだこれは。

子どもの部屋の散らかり方といったら、全くひどいものだ。机の上には、まんがの本と教科書、プリントなどが交互に積み重ねられている。重ねられているという能動的なものじゃない。ただ、単に、うず高く、無秩序に積もっているだけだ。片付けもせず、どんどんどんどんと重ねられた結果だ。いつ、崩れるかもしれない。

おまけに、正確に積み重ねられていないため、ピサの斜塔だ。微妙なバランスで、とりあえず成り立っている。成長する子どもと成長の限界を迎えた親との関係と同じだ。洞察したところでしょうがない。それよりも、今、ここにある危機を解決しなければ。

とにかく、これじゃあ、宿題なんかできないだろうし、明日の授業の準備もできない。その癖、いつも、翌日の朝になったら、あれがない、これがないと騒ぎ出す始末だ。また、その横には、いつ削ったのか疑わしいような、先がまるまった鉛筆と小さく分裂し、自分の存在さえも失ってしまいそうな消しゴムが転がり、傍目には、幾何学模様を描いているように見える。これはきっと、机がはるかかなたに住む宇宙人に向けて、早く助けて、この部屋をきれいにすると発している、メッセージじゃないだろうか。

机の上だけじゃない。床の上にも、マンガのコミックや学校から借りてきた本が、机の上以上に、ひっくり返され、散らばったまま。それも、すべてが、読み捨てられたように、開いたまま、瀬戸内海の小島のように、点在している。見渡す景色は、多島美なのか、読書の習慣が根づいていることを喜ぶべきか。

しかし、それぞれの本が完結された様子はない。一体、子供の頭の中は、どうなっているのだ。全てを読み終えないまま、次の本を読むなんて、どうかしている。俺なら、途中まで読みかけの本が気になって、他の本を読み始めることなんてできやしない。所詮、途中でほっぽり出してもいい程度の内容の本なのか。

と、言いながら、自分のオフィスの机には、道半ばの仕事の書類がうず高く重ねられている。趣味と生活の糧とどちらを優先すべきか。うーん、それは、遊びをせんと生まれけりだ。とりあえず、自分を肯定しておいて、竜介よ、いろいろなことにチャレンジをするのはいいことだが、きちんと部屋ぐらい片付けてくれ、パパからのお願いだ。

本以外にも、そろばん、笛、縄跳びなど文房具がフローリングの上で自分の存在価値を主張し

ている。だが、所有者はそれに気づかない。毎朝、探し物はどこですかを口ずさむ。見つけやすいところにあるのに、見つけにくい状態にしているじゃないですか、うっふっふーと俺は突っこむ。

だが、竜介にとっては、床の上全体が大きな机なのかも知れない。狭い勉強机に飽きたのか、部屋全体を机としている。もしかしたら、自分の部屋だけじゃなく、この家全体が、竜介にとって机なのかも知れない。それなら、竜介は大物なのだ。さすが、我が子。妙に、納得し、感心し、ついでにこちらまで胸を張る。

確かに、ひとりっ子の竜介だから、いずれはこの家を相続して自分のものになる。そこまで計算済みなのか。さらに、もう一度感心する。それなら、俺が退職後もまだ残っているこの家のローンの支払いを竜介のために残しておいてやろう、借金のリレーというわけだ。今後の、少子化、高齢化社会に適応した方法なのだ。

少し、安心するが、俺が退職を迎える頃、果たして、竜介は職についているのだろうか。安定した収入があるのだろうか。今はやりのフリーターじゃないだろうか。俺の年金を当てにしているんじゃないだろうか。望遠鏡を覗いても竜介の未来は見えない。やっぱり不安になる。

だが、それまで、世代間流用予定のこの家が存在しているのだろうか。ほら、見ろ。飴やガム、クッキーなどのお菓子の包装紙までもがあちこちに散らばっている。御丁寧に、包みには、お菓子の食べ残りが当然のようにひっついていて。アリさん、ゴキブリさん、いらっしやいと招いているのか。ひょっとしたら、ネズミだって、キツネだって、クマだって、えさを求めてこの家にやってくるかもしれない。

心根のやさしい俺としては、一匹や一頭なら、寒さの厳しい冬を、動物たちがこの部屋で過ごすのは構わないが、ひょっとして、銃を持った猟師でもやってきたら大変だ。動物たちだけでなく、俺たち家族も撃たれてしまう。撃たれるだけならまだしも、死体の皮を剥がされてしまったらもっと大変だ。姿形の残るミイラなら許せるが、ぺらぺらの皮一枚になってしまったら、俺の証拠がなくなってしまう。

せめて、生きてきた証に骨だけでも残して欲しい。まして、俺の皮がソファーにでもかけて、大切に取扱ってくれるのならうれしいが、雑巾代わりに、汚れちゃったこの部屋のそうじに使われるだけ使われ、汚れるだけ汚され、それじゃあ、またねとポイ捨てされるなんて、俺の未来は真っ黒だ。この悲しみは例えようがあるのか。

また、銃弾が俺の体に当たらなくても、家中が銃で風穴を開けられるのは間違いない。何度も繰り返すようだが、まだ、ローンの支払いは残っているし、支払方法だって、これから竜介と協議する必要があるのに、なんとかしてくれだ。それに、いくら、日本の家は夏を旨とすべしだといっても、壁穴だらけの家には住めない。

夏はともかく、冬は北風小僧のオンパレードだ。小僧がたくさんなら大僧か。下らん、洒落を言っている場合じゃない。穴を塞げないのなら、各部屋に空調機を複数台設置しないと快適な生活が遅れない。早速、ヤマダ電機に走れ。乗り遅れるな。買うならやっぱり、地球にやさしく、俺の懐に厳しいエコ商品だ。

だが、家のローンに続き、クーラーもローンとなる。ローン、ローンと一発じゃなく、一括支

払できなくて、泣き叫ぶか。電気代だって馬鹿にならないぞ。最近、屋根に取り付けた太陽光発電だって、これだけの消費電力はまかなえない。俺は、絶対、猟師を訴えてやるぞ。

だが、さてよ。考えようによっては、猟銃で開けられた穴を、他の事に利用できなくもないぞ。例えば、穴の大きさが野球ボール大なら、家の外の車庫と家の中のソファでキャッチボールができる。そんなにコントロールがいいはずがないだって。いや、練習をつんで、不可能を可能にするのだ。それが、人間に与えられた使命、宿命なのだ。なんでもやってみなければ、わからない。もっと大きければ、ドッジボールでだって、ハンドボールだって、パスの練習ができる。足技を鍛えれば、サッカーも可能だ。卓球なら球が小さいから、より簡単だろう。

いやいや、卓球の場合、屋外のボールは風の影響を受けやすいから、球筋が変化してしまうだろう。そんな魔術的なボールにさえも反応して、きちんと打ち返すことができれば、卓球王国中国への進出も夢ではない。堂々と殴り込みだ。愛ちゃんじゃないが、小学生から留学も可能だ。

そうだ、俺と竜介は、ピンチをチャンスに切り替えて、スポーツ親子としての道が開かれたのだ。卓球の星、野球の星、サッカーの星、その他もろもろのなんとかの星を目指して、これから俺たち親子は二人三脚で歩み始めるのだ。

まずは、地区の運動会での二人三脚からのスタートだ。階段は、一步一步上がらなければならない。たとえ、三步、ずり落ちて、四歩飛び上がれ。そのためには、俺のこのやさしい性格を何とかしなければならぬ。気に入らないことがあれば、ちゃぶ台をひっくり返せばいい。それどころか、リビング五点セットを投げ飛ばす程の気性の荒さと豪腕が必要だ。

庭の植栽なんて当たり前。ちぎっては投げ、拾っては投げと、自分の家では飽きたらず、隣近所、果てまた、自治会一帯にまで、暴風を巻き起こすのだ。地震男と呼ばれてもいい。台風男だなんて、最高の褒め言葉だ。いかん、いかん、また興奮してきた。

まあ、それは、さておき、再び、竜介の部屋に目を転ずる。お菓子の付録なのか、手足のもがれたキャラクター商品が転がっている。無残な姿だ。さてよ、こうしたお菓子は、家では買っていないはずだ、竜介がひそかに、近くのコンビニで買ってきているのか。

最近、朝食は、パンをひとかじりとゆで卵を一個、牛乳はコップに半分。成長期であるはずの子供が、いやに食べないと思っていたら、きっと、夜中に、この残骸の本体を食べているに違いない。残ったものが、化石となる。二階までもが、地層となる。勘弁してくれだ。

だが、待てよ。小遣いは、月に千百円のはずだ。（いやに細かい数字だ。自分が決めておきながら、第三者の立場で聞くともう少し何とかならないのかという気がする。もし、尋ねられたら、端数の百円は消費税込みの金額ですと答えることにしよう）包装紙が部屋全体を被えるほどのたくさんのお菓子を買う余裕はないはずだ。まさか、店から盗んできたわけではないだろう。泥棒したのかでないかと疑念が湧く。こんなに心配させるとは、我が子ならゆえ許さん。声を荒あげ、怒鳴る。

「竜介。何だ、この部屋は。竜巻でも来たのか。何もかも全てが散らかっているぞ。遊びに行く暇があったら、少しは整理整頓したらどうだ」

竜介を叱りつけようと、顔を下に向けても、床に邪魔され、子どもの姿は見えない。目と目で通じ合うものがない。二階からのお小言。果たして心と心は通じるのか。

うまい、うまい、さすが僕のパパだ。僕は、誇らしいよ。友だちにだって自慢できる。僕は、パパの子どもだから、僕もパパの名演技の血筋を引いているのだろう。でも、今の僕には、残念ながらパパのような技量は持ち合わせていない。まだまだ勉強しなければ、パパから学ばなければならぬことがたくさんある。

僕が、パパから離れてしまわない間に、僕はパパから技術をしっかりと盗まなければ。血統だけに頼れる時代はもう終わってしまっている。逆に、血筋があることで、僕たち子孫や後継者たちは、重荷となり、地中深く沈んでしまう。光り輝く天国には、大きく開いたブラックホールの落とし穴が待っている。足元に気をつければ。

人は、他人が光輝く才能を見て、自分のことのように喜ぶ反面、その人が不幸に陥る姿を見るのも好む嗜好がある。まるで、映画やテレビドラマの世界のように全てを楽しむ。そして、自分は決して傷つかない。蜜の味だけ追い求める。ラーメンじゃなく、アーメンだ。だから、僕はパパと一緒にいられる間は、パパからパパのすべてを盗むのさ。

案の定、予想どおりの子どもの返事。

「大丈夫だよ、パパ。もう一度、竜巻が来て、すべてが元通りになるよ。嵐が吹き荒れ、整理整頓さ」

一一七 パパ

何てことだ、他人まかせもはなはだしい。まして、自然現象の竜巻が来るのを期待するなんて。竜介がその気なら、俺にも考えがある。よし、それなら、俺が竜巻を起こしてやると、大きく息を吸い込み、一気に吐き出し、藁や木の家はもちろんのこと、レンガの家でもへっちゃらだいくらいの勢いで床の見えないゴミを吹き飛ばそうとした。

すると、近くに浮いていたあんぱん（アンダーパンツ、略してアンパン、つまり下着の包ではない。いちいち、説明する必要はないか）の袋が俺の口の周りにひつつき、息が出せなくなった。顔面を被ったビニールがビビビビビビと自分をPRしているかのように低音で震えている。

いい音色だ。草笛じゃなく、ビニール笛だ。俺の息の根が止まるまで聞いていたい。待てよ、俺は、竜巻を起こそうとして、新しい楽器を創造したのかもしれない。破壊からこそ新しいものが生まれるのだ。またひとつ、真実の言葉を見つけることができた。真理とは何かを知った。まあ、身長が伸びた分、肺も大きくなり、肺活量が増えたせいで、人間掃除機のみねができただけだろう、そんなことにいちいち喜んで仕方がない。と、軽く自分をいなす。いなせな兄ちゃん、ハイハイ。陽気な自分が可愛い。

竜介の部屋で格闘している間も、背がどんどん伸びていく。竹の子の気持ちが少しはわかる気がする。体の成長に、果たして心は成長するのか。まあまあまあ、殻だけ、いや、もとえ、体だけ大きくなってと昔俺が住んでいた近所のおばちゃんの声が耳の奥から聞こえてくる。

それに、ずん、ずん、ずん、ずんと背が伸びるのはいいが、俺の体に纏わり付いている服は、残念なことに、同じように成長はしない。どん、どん、どん、どんと体に比して丈が短くなっていく。幸いなことに、横には成長しないため、破れるおそれはないが、体全体を被っていたはずなのに、今は、胸の乳首を隠す程度だ。惑わない年で、臍だしルックだ。俺の色気で人を惑わせられるのか。臍が見られるのなら、昨日の晩に風呂に入ったときに、丹念に、綺麗に、ゴマひとつなく洗っておくのだった。体の中心なのに、普段は服で隠れているからか、臍のことなんか気にもかけていない。

目やに、鼻くそ、足の爪や手の爪、髪の毛など末端のことばかりに、これまで神経を集中してきすぎた。見えるところだけきれいにしておけばいい。四角い部屋を丸く掃く。掃いた後は、そのまま。風が吹いて、全てが元通り。こんな気持ちが仇となるのだ。体の中心から、きれい、きれいを始めるのだ。また、反省、反省。己を省みるうちに、俺の頭は子どもの部屋の照明器具にぶちあたり、とうとう天井を突き抜けた。

メッキメキという天井を突き破る俺の頭の上を何かが走った。なんだ、なんだ、俺の身長を押し上げてくれる存在は。この絶望的な危機の状況で、希望しない成長を止めてくれる最後の願の主は。それとも、我が身に降りかかった災難を哀れんで、神の力がまさに発揮されんとしているのか。おー、神よ。我を助けたまえ。

しかし、神の化身の正体は、薄暗い天井裏を走る小動物。目を凝らして見ると、それはネズミ

。希望の星でもなく、まして絶大なる力を持つ神でもなく、単なる家のやっかいものの存在じゃないか。今の俺と同様に。そうか、やっぱり、こんなところに巣があったのか。台所のパンやお菓子が齧られるわけだ。さっきの竜介の部屋の散らかり具合も一部はこいつらのせいかも知れない。竜介が言っていた竜巻は、ねずみのことなのか。

よし、せっかく見つけたのだから、この際、退治してやれ。と、手を伸ばそうとするが、二階床にひっかかって肩が持ち上がらない。無理に肩を上げれば二階ごと家がふっとんでしまう。屋根のない家では夜露はしのげない。ネズミの駆除を優先するのか、屋根のない家に住むのか、究極の二者選択だ。頭の中を洗濯すれば、どちらを選ぶか一目瞭然。思案にくれる巨大生物を横目に、ネズミたちは、チュンと屋根裏に別れの言葉を投げかけ、通風孔から外に逃げてしまった。後に残されたのは、黒い糞のみ。去る者が、後に痕跡を残してくれた。またひとつ我が家に化石が増えた。この家はどんどんと博物館化していく。

腹いせに叫ぶ。くそっ、逃げられたか。まあ、いい。逃げられたんじゃない。見逃してやったんだ。背が伸びていることだし、肺も大きくなったし、心だって大きくなると。頭は天井裏を突き抜けて、光に照らされた。太陽さん、こんにちは。俺は、太陽に向かって、ひまわりのような笑顔で声をかけた。正面から見た、太陽はまぶしい。俺の存在を肯定してくれているのか、否定しているのか。日の光が、俺の成長源ではないことは確かだ。

二一七 僕

パパは今どこにいるのだろう。さっきから、僕の突っ込みに反応してくれるものの、何を考え、どこの想像の世界で浮遊しているのかはわからない。半目に開いたやや黒い瞳を覗いて見るものの、頭の中まではわからない。モニターか何かがあって、パパが今遊んでいる世界が僕にも見えたらいいのに。僕は、パパにとって外人なのだろう。でも、きっとパパの夢の中では、僕が内人として存在している。もう一人の僕よ、パパを助けてあげて。

「パパ、パパ、大きな音がしたけれど、大丈夫？」

一一八 パパ・二一八 僕

一一八 パパ

竜介の声だ。今度は、俺のことを心配してくれる声だ。ちゃんとわかってきている。学習効果は絶大だ。たとえ、過去が間違っているとしても、その過ちを正せば、未来は正しい行動ができるのだ。俺は、思いっきりやさしい声で竜介に声をかけた。太陽からもらったまぶしさを暖かさに変えて。

「パパは大丈夫だよ。庭に出てごらん、パパの顔が見えるから」

ハイリ、ハイリホ、ハイリホ。

二一八 僕

さあ、次はどんな言葉をかけたらいいのだろう。これまでの、数少ない会話やパパの寝相姿から想像しなくちゃいけない。とにかく、何かに行き詰まったときは動き出さなくちゃ。じっとしていても時間が過ぎるだけ。時間が過ぎるだけならいいけど、何かをしなくちゃいけないというプレッシャーだけが脳に重く押し掛かり、心が萎縮し、よけいに動き出せなくなってしまう。パパと僕の束の間の触れ合いの時。パパ、動き出すよ。

「パパがおうちの服を着ている」

一一九 パパ

おうちの服か。なかなかいい表現だ。今は、夏だから、窓もあけっぱなしで、下着姿みたいだが、秋に向けては、カーテンなんかを模様替えして、少しはおしゃれをしなくては。しかし、しつこいようだが、ローンがまだ二十年も残っているのに、屋根にまで大きな穴をあけてしまった。あと、二十年、俺が退職してもまだ五年間も残っているこの現実はなんだ。

最初からローンを組むときからわかってはいたが、実際、家を建てる時なんか、まず、家を買うことが頭の中にあるから、後はなんとかなるだろうという気持ちのため、突き詰めて、自分が退職したときの姿なんて思い浮かべていなかった。毎日、毎日仕事に行き、年を取り、体が老化すること、家も同様に古びてガタがくること、そして、家のローンを返済しきったとき、家主の俺はあの世行き、家もひよっとしたら、次世代の要望に答えられず、取り壊しの運命にあるかも知れない。

うーん、一体、家を建てるということは、俺にとって、何の意味があるのか。俺がこの世に存在しているときの、単なる欲望の発散場なのか。結果的には、建築会社や、カーテン屋、電気店、銀行などに金を払っただけだ。それを功德と言えば功德、善行と言えば善行だ。だが、これまでの俺の行為も、こうして巨大化した結果、すべて御和算にしてしまった。また、もう一度、建築会社やカーテン屋、電気店、銀行などに金を払って、この家を修繕・建設しなければならないのか。せめて、保険でも、自然災害として認定してくれないだろうか。

好きで、俺は巨大化した訳ではない。自然に、そう自然に身長が伸びた結果、家の屋根に穴を開けてしまったのだ。穴を開けてしまったなんて可愛いものではない。家を破壊してしまったのだ。これこそ、自然災害以外のなにものでもない。生命保険や傷害保険だって、巨大化する人間への精神的・肉体的苦痛に対して、なんらかの慰謝料がでるんじゃないだろうか。知り合いの弁護士に相談してもいい。

そんなことを考えているうちにも、背は伸び続け、家の近くの神社の神木と肩が並ぶほどになった。神社は、俺の家からほんの百メートルほどの距離にあり、神木は、市の重要文化財に認定されている古木のけやきだ。胴回り三メートルほどで、大人二人で手を回せばなんとか抱きかかえられる。小学生なら三人は必要だ。

そんな巨木も、巨大化した俺にとっては、背の高さだけは同じの、お友達になった。友達と言っても、年齢は、向こうが大先輩。こちらは、たかだか四十年余りの若造。ひよっこのピヨピヨ。決して、俺が先輩になることはない。俺の子供の竜介、その子供、そのまた子供、そのまたまた子供、と世代を超えた長いつきあいが必要だ。

お近づきのしるしにあいさつに伺う。今までは、かえって近すぎることもあって、あまり神社に足を運ぶことはなかった。行くとしても、正月の初詣と秋祭り、それに子どもと一緒にいく蟬取りだ。信心深かったわけでない。だが、身長が巨大化し、自宅を自らが破壊するという不幸の状況に陥ったからには、神仏にすがりたい気持ちが、不幸の大きさ分だけ沸いてくる。

さあ、進もう。右足を一步、左足を一步踏み出し、失礼して、鳥居を一跨ぎで、もう、こんにちだ。神社を見下ろしながら頭を下げる。しかし、あんまり近すぎるのもよくない。せっかくやってきたという気持ちが沸かないし、相手だって、すいませんねえ、遠い所によろそなんて言えないじゃないか。こんなに、近けりゃ、共に、赤面して、うつむくしかない。

それとも、全く、感情なしで、思ってもいない言葉、おはようございます、今日はいい天気ですね、なんてしらじらしく、相手の目を見ずにしゃべるかだ。その時の視線は、斜め四十五度。少し視線は下向き加減。俺の最も得意とする角度だ。すべてのこととはすにかまえる態度は、俺の人生そのものだ。絶えず傍観者でいる。物事には、近すぎて遠くなること、親しみが憎悪に変わる事、親切が仇になることが往々にしてある。俺のこれまでのささやかな人生経験を踏まえて、俺自身がつつましく生きていくための方法なのだ。

おっ、こんなところにクマゼミだ。巨人になる前の、大人の俺にとっても、手を伸ばしても、網を持って、届かないところで、おい、くやしいかい、くやしかったら、ここまでおいで、あっかんべーと放言を繰り返しているように鳴いている奴だが、今なら、俺の腹ぐらいのところに止まっている。

今までの恨みをはらさん、と手のひらをいっぱい広げ、幹全体を被った。暴れる、暴れる。少し、くすぐったい。だが、所詮、お前は、孫悟空だ。いくら暴れたところで、俺の手の世界から逃げ出すことはできない。いつも、足元からしか攻撃を受けていないから、まさか頭上から、捕獲されるとは思わなかったのだろう。

あまいぞ、クマゼミ。どうだ、参ったか。だが、蟬を生け捕りにしたものの、巨大化した俺の指では、こんな小さなものを掴むことはできない。へたに掴もうとしたら、押しつぶしてしまう。いくら恨み骨髓の相手でも、ひねりつぶすのはよくない。まして神社の中で、殺生するのは気が引ける。ただただ、捕獲あるのみ。

竜介に叫ぶ。網を取ってくれ。今なら、蟬が取り放題、掴み放題だぞ。知らない間に俺の後を着いて来ていた竜介が返事をした。

二一九 僕

パパは昔、どんな子どもだったのだろう。今と同じようにテレビゲームやカードゲームがあったわけじゃないから、どんな遊びをしていたのだろう。パパが時々しゃべる言葉を聞くと、今の僕と同じように、マンガの週刊誌や月刊誌をよく読んでいたみたいだ。

その他には、学校から帰ってくると、近所の公園で、いいや、パパが子どもの頃は、まだ今の公園は整備されていなかったようだ。海岸の埋立地やまだ家の建っていない空き地で、ソフトボールや鬼ごっこなんかをして遊んでいたみたいだ。

今の僕たちは、それぞれがDSやPSPなどの小型のテレビゲームを友だちの家に持ち寄り、個々が勝手に遊んでいる。時には、友だちがどこまでステージをクリアしているか覗き込んだりもする。一緒にいるようで、一緒にいない。友達の家がゲームセンターになっている。大きな器の中の、小さな世界。別々にいるようでも、友達と同じ空間で、同じ体験をしているという仲間

意識は生まれてくる。だけど、ゲーム上でこれだけ脳が擬似体験をしてしまうと、体が本当に経験する必要がなくなってしまう。

体験のコンビニエンス化。なんでも、手軽に、すぐ手に入る。いいことだ。だから、僕の将来の夢は、ゲームをプログラムする人、プログラマーだ。僕が与えられたように、僕の未来の子ども達に夢を与えるんだ。夢は、夢で恩返しをする。僕の想像の範囲内の夢を。パパにも僕の夢を分けてあげよう。

「うん、わかった、パパ」

一一十 パパ

大きな返事のあと、子どもが家に向かって走り出す。俺の動きがスローモーションならば、子供の足は、高速回転だ。俺の一步が、子供の全速力の数十歩。どちらが一所懸命なのだろうか。象は象で、ネズミはネズミで、自分の生きるリズムがある。比較しても意味がない。世界でひとつだけの俺の生き方。それは、どこ。

間もなくして、竜介が竜介なりの方法で、俺の足下に帰ってきた。体の身長ほどもある網にしがみついているかのように見える竜介。彼から網を受け取り、ひとさし指と薬指の間に蠢いている物体に網を被せる。

びびびびーと音がしたかと思うと、指に奇妙な感触が流れた。

やられた。蟬には逃げられるし、おしっこはかけられる始末。相手より高くなったところで、蟬が簡単に捕まえられるものではない。相手を見下せば、かえって相手に見下される。とんだ有様だ。そして、無様な姿を子供に見せてしまった。

二一十 僕

せっかくファーストステージをクリアできたかと思ったのに、残念。でも、大丈夫。もう一度やり直せばいいんだ。ゲームは何回でも繰り返すことができる。時間がある限り、生きるエネルギーがある限り。時には、ゲーマーがいなくても、機械自身がゲームをやり続けることもある。そこでは、人間はいらない。だから、パパ、頑張る。

「パパ、逃げられたの？」

一一一 パパ

「逃げられたんじゃないんだ。逃がしてやったんだ」

うーん、このセリフどこかで言った覚えがある。

「だけど、ちゃんと、蟬のしっこの情報は入手したぞ。この臭いを、犬のジョンに嗅がせて、あの蟬がどこへ逃げたか追跡しよう」

どこまでも、親の威厳を守らなければならない。守るべきものは、それだけか。

二一一 僕

僕はゲームのプログラマーだ。よりゲームを面白くできるのであれば、お客様の意見を取り入れることが必要だ。人間なんて、自分一人が考えていることなんて、たかが知れている。自分だけのオリジナルなんてありえない。互いに、互いが影響し会ってこそ、面白いものが生み出される。

だから、他人の意見を取り入れることで、より多彩な、深みのあるゲームが作れるんだ。時には、的を外れた意見もあるが、根本にある主旨を巧みに受け入れる、受け入れたふりをすることも必要だ。パパ、貴重な御意見ありがとう。

「うん、わかった、パパ。それは、名案だね。でも、ジョンにも蟬と同じように羽をつけないとダメだよ。」

一一十二 パパ

子供もちゃんと、分かってくれてくれる。親が失敗しても、失敗だとあからさまには言わない。常に、前向きに、次の善処策を考えていてくれる。ありがたいことだ。少しぐらいなら、疑問もいい。疑問のないところに、解決策はない。発展はない。ほら、あの道路の石ころにだって存在理由がある。

ただ、その存在も、時には、庭石にだって利用したり、邪魔だと言ってどこかに捨てられたり、人間の勝手な振る舞い、ひとりよがりの思いに翻弄されるのだ。石は石なのに、意思はないのか。あるのは、人間の御都合だけだ。転がれ、石よ。怒れよ、石よ。

ぐぐぐぐぐ。

再び、背筋が伸びる音だ。神社とも、巨木とも、お別れの手を振る間もなく、蝉からは離別のお土産をもらって、俺は、電波塔と兄弟になった。ここまで、背が高くなると、今までと、もの見方が変わってくる。もはや蝉になんか関心はもたない。すべてが見えることは、すべてを支配、管理している気持ちになる。

いい気分だ。出張に行くと、必ず、その街の一番高いシンボルタワーやお城に登りたくなる。デパートでもいい。時には、何時間も歩いて山に登ったりもする。そこに山があるから山に登るのではない。

人は、何かがなくとも高い所を目指すのだ。高いところがなければ、高いものを無理やり作り出す、産み出す。空間的にも、組織的にも。競争のように、見えない階段を一步一步と登り続け、頂上を目指す。ここが、最高地点かと感無量の声をあげた瞬間、誰かに（犯人はわかっている。俺の後ろを一緒に登ってきていた仲間のあいつだ。敵は本能のままに動く）階段をはずされ転落する。裸の階段。それは、お前の心にある。

ふと気になり、背中後ろを振り返ると、普段、竜介とキャッチボールの練習をよくする、通称「お山の公園」では、アリ粒みみたいな子供たちが、野球をしている。いや、まて、それが、野球なのか、ドッジボールなのか、サッカーなのか、卓球なのかどうかも分からない。そう、どうでもよくなるのかも知れない。アリが、冬支度に備えて、自分たちよりも巨大な蝉の死体を運んでいるのを見かけても、それ、がんばれと声をかける人間なんていやしない。

いや、実は、俺、ふと瞬間、道端にうずくまり、アリを応援することがたまにある。しまった、衝撃的な告白だ。自分で、自分の行動を十分に管理ができていない証拠だ。だが、所詮は、掛け声のみ。巣穴にまで、魂の抜け殻の蝉を運んでやることはしない。

また、アリに向かって、頑張れ、頑張れと応援している姿を、近所の人にはあまり見られたくない。噂なんて、水面に投じた小石のように、あっという間に広がり、俺を襲う大波となる。本当の事実だけが広がるのならばいいが（本当の事実なんてあるのか、俺が解釈して欲しい事実ならたくさんある。）、アリと戯れる男なんて、たわぶれもいいところだ。

ぐぐぐぐぐぐ。

また、また視野が広がる。先程までと違って、うれしい悲鳴がこの音には込められている。だが、たまには、音よ、ちょきもパーも使え。ぐーとぱーならば一の勝ち、ぱーとちょきならちょきの勝ち、ちょきとぐーならぐーの勝ち。

じゃんけんは微妙な関係性の上で成り立っている。誰もが誰かに勝つことができるが、誰もが誰かに負けることになる。圧倒的優位性と圧倒的不利性。互いが互いに三竦みの中にいる。

いばらず、恐れず、そして、いつまでも仲良く。誰かに勝つことを考えるのではなく、傷つけあうことなく引き分ける。常に、私以外の誰かがいるのだから、その人と一緒に生きることを考えなさい。これが、じゃんけんの教えだ。じゃんけんよ、永遠に人間関係のシンボルとなれ。

そう思う間もなく、とうとう、雲のまにまにまで顔が突き出た。童話にあるように、昔の人たちは、世界各地で、人種を問わず、また、時代を超えて、空高く、自分たちが見えない所にも、必ず、生き物がいると信じていたのだ。その生物は、人間とは異なる力を持った恐ろしい存在であり、時には、崇拜の対象者。雷さま、ジャックと豆の木の鬼など例をあげればきりが無い。

ただし、残念ながら、俺の視線の先には、太鼓もお城もない。この二つの目が証人だ。俺は、豆の木を使わずに、それを確認できた。豆の恩返しを受けずにだ。だが、俺の頭の隅のどこかには、金の卵を産むガチョウが飛んできてくれないか、俺の荒んだ心を癒してくれる金のハーブの音色が聞こえてこないかという期待で、脳の皺が震度五並みに揺れている。もうすぐ爆発しそうだ。

いや、まて。爆発は脳じゃなく、俺の身長だ。何故、俺は、こんなに背が伸びているのだろうか。これとっていままでいいことをした覚えはない。まあ、たいてい、自分がいいことをしていると思ってやっていることなんて、所詮、底が知れている。

それは、善意より、うわっぱりの名誉欲なのだろう。人のためじゃなく、自分のためにやっていることが誰にでも目にわかる。だから、その恩恵も長持ちはせず、すぐに登りつめた所から落ちるのだろう。その落ちるときのスピードの速いの速くないの、つまり速いということだ。

もう二度と上を見ることができないほどにまで落ち込んでしまうほどの暗い水底で、後の一生を何年も、何十年も過ごさなければならない。物理的な時間の長さよりも、精神的に感じる時間の長さの方がもっと心を打ちひしがせる。もう、誰にも相手にされない哀しみ。人がひとり一人いない島で、ひとりであるのは寂しいかも知れないが、人で溢れ返る街のなかで誰も話をする相手がいない一人は地獄だ。

なんだか、早口言葉みたいで、舌を噛みそうだ。もう一度繰り返してもいいが、あまりぶつぶつ言い出すと、満員電車の中でも、俺の回り一メートルは、ぽっかりと空間が開きそうだ。だが、こんな俺にも、ひょっとしたら、ザイルか、紐か、ビニールテープか、毛糸か、刺繍糸かなにかが下りてきて、この状況から抜け出す最後のチャンスが与えられるかもしれない。

その時には、周りを見渡し、俺以外の誰もこの穴蔵にいないこと確認し、おそろおそろ手を伸ばす。その頼りなき紐を途中まで登った時に、ひょっと万が一誰かが登ってきたとしても、俺は、あの太陽がくれた微笑を決して絶やすことなく、一緒に登りましょうと声を掛けてやるだろう。

そして、相手の腕力が落ち、紐からすべり落ちそうになったら手を差し出して、助けてやるか

もしれない。もちろん、天上から神様が見ていることを意識しているからだ。学習効果は抜群だ。龍之介ありがとう。それでも、思いもかけず紐が鞭に変わり、俺を再度奈落の底に突き落としたところで、俺はかまわない。残りの人生をもう一人の奴と一緒にいられることがわかったのだから。

うーん、やはり、人は一人で生きられないということか。愛すべき人だろうが、憎むべき奴だろうが、相対的に自分を認識できる誰かが欲しいということか。誰かがいるから自分なのだ。宇宙の暗闇の中で自分一人がいるとしたら、その自分とは一体何なのだ。生きているのか、死んでいるのか。このことを考えている意識さえも本当に存在するのか。

意識ついでに、思い出したぞ。俺がこんなに背が伸びているのも、昨日の夜食べた納豆が原因かも知れない。（話が飛びすぎだ。宇宙まで行っちゃっているぞ）俺の胃袋で芽を出した豆が、脊髓に入り、ここまで背を伸ばしているのじゃないだろうか。そうすると、俺の背が伸びるのもここまでか。

俺の体を見る。今のところ、葉っぱが出ている様子はない。皮膚が緑色にも変化していない。どちらかと言えば、太陽を身近に受けて真っ黒だ。まだ、豆人間に変身した訳ではない。ほっと、安堵。だが、おてんとうさまがいやにあったかく感じる。

太陽の恵みに感謝するものの、今までと異なる感覚に一抹の不安。太陽に雲がかかる。心の底から、理由なき怒りが巻き起こる。おーい雲よ、さっさとどけよ。どかないのなら、綿菓子にして食べちゃうぞ。雲を巻き取るため、神社の枯れ枝に手を伸ばそうとする。

それより、待てよ。今の俺の姿を見て、昔、寝る前に読み聞かせた絵本のように、竜介が、俺の体を登ってくるんじゃないだろうか。何だか、足がちくちくするぞ。首を曲げて足元を見る。思ったとおりだ。すね毛を掴んで、竜介が、ロッククライミングのように、俺の体を登ってきている。まだ、全体の一合目程度だ。足元では、危険を知らせてか、それとも、応援しているのか、羽の生えていないジョンが吠え続けている。

「おーい、竜介、危ないから、登って来るのはやめなさい」

二一十二 僕

セカンドステージに入った。次の展開はどうしたらいいだろう。こちらのリアクションを待たずして、パパは既に臨戦態勢だ。できる限りパパの望む方向に話を進めたいのはやまやまだ。僕は孝行息子だから。それぐらいしか、子供の僕にはできないのも事実だけど。

とにかく、何か言葉を発しないと、パパは永遠に自分の殻の中に閉じこもってしまう。開けゴマ。次なる合言葉は。

「パパ、パパ、何か面白いことが見えているの。僕もパパと一緒に見てみたいよ」

一一十三 パパ

泣かせる台詞だ。パパと一緒にだって。普段は、毎日、仕事が忙しいため、遊ぶことはもちろん、夕食も別々だ。休みの日ぐらい、父親と一緒に何かをしたい気持ちなのだろう。俺だって一緒だ。手を握ってやりたいし、いたいけな寝顔に俺のほほこをひっつけたい。この瞬間が、俺にとっては最高の幸せだ。一日の疲れた分伸びた不精ひげをいやがってか、眠りに落ちた子どもは顔の向きを変える。愛情の拒否か。

いや、そうじゃない。俺の存在を認めてくれたのだ。ありがたいことだ。そうだ。どうせ地獄に落ちるのなら、竜介と一緒にいいのかもしれない。

いかん、いかん、何をたわけたことを言っているんだ、この俺は。竜介はこれからの成長していく人間だ。未来ある人間だ。俺も、物理的には成長し続けているが、破滅に向けての階段を登っているに過ぎない。こんな、俺と一緒にしてはいけない。一緒にいいのに、一緒に駄目か。右斜め四五度の気分。どこにも下がれない。立ち尽くすのみ。ある意味で、じゃんけんの膠着状況。後だしじゃんけんで解決可能か。とにかく、竜介を危険な目に遭わせてはいけない。まずは、そのことから実行あるのみ。

「人食い大男も、雷さんも、金のハーブも、金のガチョウも見えないよ。だから、もう、パパの足から降りなさい」

二一十三 僕

そうきたか。何か知らないけど、昔読んだ、童話を思い出した。今のパパの言葉から推測すると、ジャックと豆の木の話らしい。でも、雷さんは登場しないはずだ。それとも、日本バージョン、パパバージョンでは、人食い大男の友だちに雷さまがいるのかも知れない。人食い大男が雷さまなのかも知れない。

だけど、これだけの情報では、話が掴めない。もっとパパのことを解りたいから、このまま話を続けてみよう。僕って大人だなあ。パパ、今度は、僕がボケるから、突っ込んでよ。

「ちょっと待ってよ。今から、すぐにパパの側に行くから。しまった、あー、いたたたーあ」

一一十四 パパ

竜介の悲鳴だ。

「大丈夫か、竜介」と、心配の言葉をかけるものの、巨大化した俺からは米粒程度にしか見えない。高みの見物じゃないけれど、単に声を掛けるだけ。愛情はいっぱいだが、具体的行動には欠けている。

雲の高さまで身長が伸びてしまったからには、体を折り曲げて助けてやるわけにもいかない。この身長じゃあ、ひょっとお辞儀でもしたら、航空機にぶつかるかも知れない。謝って、誤りを犯してしまう。誤りが、次の誤りを生み、そしてまた、その誤りが俺を死に至らしめる。誤りの連鎖地獄。

それに、竜介がすぐ側にいるにもかかわらず、精神的には、ものすごく離れてしまった気がする。側にいるのにこの空虚な気持ちは何なんだろう。空気が薄いのか。意識が薄れてきた。目指す宇宙は近い。

二一十四 僕

パパは今どんな気持ちなのだろう。僕のことを心配してくれているのだろうか。それとも、自分だけ遠いどこかに旅立ってしまったのだろうか。でも、パパが選んだ道ならば、僕は喜んで応援するよ。パパと僕は親子だけど、いつまでも一緒にいるわけにはいかない。

僕がパパから離れるのか、パパが僕から離れるのか、どちらか分らないけど、そんなことはどちらでもいい。どうせ、別れるのなら、お互い笑いあって手を振りたいものだ。心配なんか決してさせたくない。パパ、これまでありがとう。そして、これからもよろしく。

「大丈夫だよ、パパ」

竜介のかぼそい声がする。そうか、声まで遠くなってしまったのか。頭を雲に突き出して、富士山二世になろうとしている以上、竜介の顔はもちろんのこと、体だってまともに見ることができない。まともに見ることができないのは、竜介だけじゃない。自分自身だって、雲の上の水平線からでは、全体像が掴めない。道路の穴に足を突っ込み、つめをはがし、後から生えてきたものの、いびつな成長を繰り返して、盛り上がったままの右足の親指。

子供の頃、自転車で転がり、何度も血を流し、その度に、自分のつばやよもぎの汁をつけて応急処置をして、かさぶたの再生を繰り返した膝っ小僧。ビールの飲みすぎか、運動不足なのか、腹筋が弱り、ぼてっとたるみ出し、幾重にも海溝ができたお腹。大笑いすれば大地震が起きそうだ。そこに、晩酌のビールがこぼれたら、大自然が堪能できる。

親指の爪よ、膝っ小僧よ、筋力のないお腹よ、今も元気でやっているのか。俺のからだであって、俺が関わりを持ってない。目の前にありながら、どこか遠くへ行ってしまった俺のからだ。それとも、俺の意識だけが、どこかへ封じ込まれたのか。肉体だけの成長。しかし、今、生きていと認識できるのは、俺の意識でしかない。俺は、俺のこの頭の中で、勝手に生きていと言いつつ放っているだけなのだろうか。

だが、現実を直視すれば、このまま、さらに身長が伸び続ければ、俺の頭は大気圏を突入し、宇宙へ解き放たれる。宇宙さん、こんにちわだ。宇宙には空気がない。大気圏から顔を出しても、すぐさま、亀のように体の中へ首を引っ込めなければならない。それでも、我慢できるのは、一分間か二分間くらいだろう。

我慢と言えば、小学生の頃、水泳の練習ため、風呂場でたらいに水を張り、顔を突っ込み、息がどれくらい持つのか練習をしたことを思い出した。新聞の広告の裏に、日記のように、毎日の記録を書き続けたものだ。俺だけの、個人記録であり、日本記録であり、世界記録。その記録を破ることに達成感・満足感を得た。一日一日のささやかだが、着実な進歩。俺は、こんなにすばらしいのだと。自分で自分のことを褒めてやりたい。肉体への誉れ。自己実現がこんなに楽しいものだとは。十歳足らずで、既に、人生の仕事をすべて成し遂げてしまった充実感。これまで生きていてよかったと思える最高の瞬間。

練習の成果で、二十五メートルぐらいなら、潜ったまま、手は平泳ぎ、足はバタ足で、泳ぐことができた。プールの中点地点では、息も苦しくなく、全く、平気だが、さすがに、ゴールの目前になると、もがきながら、五、四、三、二、一、ゴールと、自分で自分を励ましながらか、最後の一手で水をかき、指の先を精一杯伸ばし、コンクリートの壁にタッチする。と、同時に、プールの底にしっかりと足を着け、顔を水面から持ち上げ、口を始め、体中の穴という穴を全開する。

あたり一面の空気が俺の肺、俺の皮膚に急激に流れ込み、小腸、胃、食道までもがみるみると膨れ上がる。このまま、体全身が膨らんだら、風船となって空に浮かび上がるのではないかと

いの勢いで。そうか、俺は、この頃から、空を目指していたんだ。宇宙を目指していたんだ。水から空へ。

身長が伸びて家突き破ろうが、風船となって浮かび上がろうが、どちらにせよ、俺は、地球の外にでたかったのだ。宇宙飛行士ではなく、別の、俺だけのオリジナルの方法で。だが、地球の外へ一歩でも出れば、命はない。しかし、地上にいたままの俺では、生きている資格がない。生きている意味がない。

俺の頭の中を、矛盾が駆け巡る。その間、俺の背は、休む間もなくぐんぐんと伸びていく。これはどうすることもできない流れなのだ。勢いなのだ。俺の中の成長ホルモンが、俺自身を滅亡させるために、加速しながら流れ出している。俺が死ぬことで始めて、成長ホルモンを止めることができる。成長ホルモンの流出を防ぐ唯一の手段が、俺の死だと皮肉なことだ。成長ホルモンよ、何故、そんなに生き急ぐのだ。

ほら、昼なのに、一番星が見えてきた。手を伸ばせば、届く距離だ。あの星は時限爆弾だ。俺が、あの希望を掴んだ瞬間、自爆する。竜介、いざさらば。お前と出会えてよかった。感傷的な言葉も、もう、ここまで頭が到着したからには、俺から見るとミクロの世界にいる竜介の耳には届かないだろう。辞世の句をしたためる。大人になったら、もう成長しなくていいのだ。進歩と成長は異なるのだ。

その時、俺の歴史が動いた。いや、俺の、身長が動いた。目の前まで、見えた星がどんどん遠ざかっていくではないか。あっという声を出す間もなく、雲の上にまで、頭が降りて来た。成長ホルモンから短縮ホルモンに変わったのか。

世界平和と称して、各国の力を誇示し、相手国から脅威を得るために打ち上げられた観測衛星とさよならし、時間短縮のために、そして自らの寿命を縮めることにもなる、空を我が物顔で飛ぶ航空機に再び、こんにちは。俺の体は、宇宙の灯台から空の道標に格下げだ。なんと喜ばしいことだ。その空の道標も雲の中に隠れ、電波塔と肩を並べるほどの高さになった。

二一十五 僕

あんな風に言っただけなのに、やっぱり別れは辛い。僕がパパの許から離れて行ったとしても、やがては、パパの許に帰るのだろう。それは、いつのことだろう。これから、僕が中学生となり、高校生となり、大学生となり、就職して、自分の道を歩み始め、お盆や正月などたまの休みに帰省し、パパが若い頃はああだったとか、竜介が小さい頃はこうだったとか、お互いにとりとめない会話をして、生きている存在、生きてきた道程を確認しあう。

たった、それだけの行為だけど、ああ今年も、親許に帰ってきたという満足感。今の僕にはちょっと解らないけど、ゴールウィークなどの長期休暇には帰省をするのが国民的行事として認知されている以上、何かの意味があるのだろう。人は、何か大義名分的な理由がないと動けないのだろうか。

でも、動機はどうであれ、自然と、ゆるやかに、流れていくのだろう。それとも、パパが僕の

場所に訪れるのだろうか。どちらにしても、必ず再会の機会が来る。その時を再現して、パパに言葉を掛けてあげよう。

「パパ、パパ、パパの顔が見えてきたよ。戻ってきたんだね」

一一十六 パパ

竜介の喜びの声が聞こえる。

俺も、確かにうれしい。

竜介、もうすぐだ、待っていてくれ。無事、地上に不時着した暁には、パパの命がけの冒険談を聞かしてあげよう。

しかしながら、待っていてくれと言ったものの、特別に、俺が何をした訳でもない。ただ、勝手に、背が伸びて、命が後わずかでなくなるところで、再び、俺の意思に関係なく、背が縮んだだけだ。

まあ、それはそれでありがたい。小学校の校舎とも同級生になった。近所のけやきの老木とも。そして、俺が大きく穴を開けた屋根とも。一階の天井とも。そして、こともあろうに、我が子の竜介とも。

二一十六 僕

いつかは、僕がパパを追い越すときが来るだろう。それは、身長や体重などの目に見える肉体的な変化だけでなく、社会人として、地位や名声、収入、社会との関わり方、人格、性格など、様々な面においてだ。ただ、それがたったひとつのことにおいてなのか、すべての面においてなのか、わからない。パパと僕は親子だけど、同じ道を歩んでいるわけじゃない。

僕はパパのコピーじゃないし、パパだって、おじいちゃん、ひいおじいちゃん、そのまた先祖のコピーじゃない。追い越す、追い越されたなんて、比較すること自体がナンセンスだ。親子で共に歩む。同じ時間を共有する。パパ、一緒に歩こうよ。

「パパ、パパ、今度は、どうしたの。せっかく、いつものパパに戻ったかと思ったのに、今は、僕と同じ背の高さだよ」

一一十七 パパ

ありがとう、竜介。いつもの確な質問をしてくれて。だが、理由は、こちらが知りたい。収縮ホルモンは、収縮の名の癖に、ホルモンの放出をやめようとしな。俺の背は、見る見るのうちに（残念ながら、自分では、自分の姿は見えない。唯一の証言者は、竜介のみだ）、竜介の肩まで、お腹まで、そして、膝までの高さに縮んでしまった。これ以上、小さくなると、俺の命が危なくなる。竜介に踏まれてしまうか、はてまた、ゴキブリと格闘するか、働きアリの餌食になってしまうかだ。

先程追い出したネズミに、仕返しとして、襲撃を受けたらどうなることか。巨大な扇風機になるような肺はない。立ち向かうことは不可能だ。つまり、死あるのみか。そうなれば、収縮ホルモンも放出をあきらめるだろう、なんだか、さっき成長ホルモンについて考えたことと同じだ。俺は、俺自身のからだに弄ばれている。

二一十七 僕

パパの手を握り締める。手のひらは柔らかい。でも、パパの本当の手は、ごつごつし、関節が節くれだち、僕より一回りも大きく分厚い。長い間生きてきた証拠のように血管が浮き出て、僕や家族を守るために、日光にさらしすぎて真っ黒になっている。この手と共に僕は歩んできたんだ。これからは、僕が導くよ。

「パパ、パパ、今、どこにいるの」

一一十八 パパ

竜介の心配そうな、だが、俺の耳には、雷よりもやかましい轟音が響き渡る。同時に巻き起こる風の風のせいで、俺の体がふきとばされそう。風速四十メートル。絨毯の毛に必死の思いでしがみつく。傍らにあるせんぎりキャベツと輪ゴムが俺の友達で、隠れ場所だ。

「竜介、パパはここにいるから安心してくれ。それより、あまり、話しかけたり、動き回ったりするのはやめてくれ。お前の一挙手一投足がパパの命に大きく左右するんだ」

力の限り、声が洩れるくらい大きな声で叫んだつもりだが、竜介の耳に届いたかどうかはわからない。蚊が飛んで来る時のブーンという音ぐらいには聞こえて欲しい。しまった。蚊と同じ音だと、潰されてかねない。

思ったとおり、竜介の両手が俺の頭の上で雷のように鳴り響く。俺は、蚊じゃない。お前の、パパだ。こんなに小さくても、威厳がなくてもお前のパパだ。両手の爆音と、それに伴って発生した強風が、再び、俺を襲う。このままでは、俺の命は風前の灯火だ。空の道標として胸をはっていたのはいつの頃だったろうか。

その時、再び、俺の歴史が動いた。ずんずんずんずん。身長が伸び始めた。成長が収縮に勝った瞬間。もう少し、命の炎を燃やしたい俺の気持ちが天に通じたのか。降り注ぐ慈愛に満ちた成長ホルモンか。だが、もう二度と天にまで背は伸びたくない。俺の視線は、横たわっていたソファーに、テーブルに、竜介の顔に、いつも身だしなみを確かめる窓ガラスの高さに戻った。ありがたいことだ。合掌。

二一十八 僕

朝早くから家を出て、汗にまみれて仕事をする中で、お客様に怒鳴られたり、上司に叱られたり、様々なストレスの洪水の海で、初期の目的を達成し終えた後、疲れ果てた体を癒すため、家に帰る。この一日に繰り返しが、この世に生まれ、生き抜いて、やがて、死を迎える人の一生だ。だから、パパ、疲れたら帰って来てよ。僕が笑顔で迎えてあげるから。おかえりなさい、パパ。

「パパ、パパ、お帰りなさい」

一一十九 パパ

竜介が抱きついてきた。

俺も強く抱きしめた。

二一十九 僕

パパはパパでパパの道を歩んできた。僕は僕で、僕の道を歩むことになる。だからと言って、僕とパパが離れ離れになるわけではない。たとえ、同じ場所で生活を共有していたところで、家族になれるわけじゃない。朝出掛けて、晩に戻る家。家を拠点とした人々。それが家族なの。合宿や寮も家族なの。毎日乗車する満員電車も一時的に家になるの。そのほうが楽しいかも。家族って何。

別れたいとも思わない存在。そこにあるがままの集団。存在を意識しない組織。また、意識しすぎると壊れてしまう結びつき。壊れてしまった後でも、修復の道が残されている組み合わせ。だからといって、未来永劫、存在しあえるものではない。関係性は、一瞬の結びつき。

僕とパパは今、どここの段階を経ているのだろう。

「もう、どこにも行かないで」

一一二十 パパ

「もちろんさ、もうどこにも行きたくないよ。ここが俺の住処だ。そして俺の死に場所だ。ローンを払い終わるまでは」

二一二十 僕

「ほんとうに、ホントだよ。ローンだけは残さないでよ」

三 ママ

「もう、いいかげんに起きなさいよ、二人とも。全く、休みの日の翌日は、いつもこうなんだから。早くしないと、会社と学校に遅れますよ。パパに竜介。あらら、二人とも何。よく見ると、手なんか握って。二人で、何かいい夢でも見ているのかしら」

女の現実の音が部屋に響き渡る。

